



Google Glassを使ってみた

執筆者

KDDI総研 特別研究員 高橋陽一

🕒 記事のポイント

2014年4月15日、Googleは開発中のメガネ型ウェアラブル端末「Google Glass」の1日限りの一般販売を実施した。まだ正式版ではなく、多数のバグがあることも予想され、利用できるサービスや機能も限られているベータ版を、1,500ドルという価格で一般に販売するとは異例だ。しかもGlassを購入した人は「Explorer」としてGlassを試用してGoogleにフィードバックし、無報酬でGlassの開発・改良に貢献することが期待されている。

サマリー

その上、最近、Glassをかけて街を歩いていたら襲われた、Glassを奪われたなどの物騒な事件が多発している。攻撃の理由は単なる不快感からだけではなく、IT企業の興隆とともに社会の格差拡大が顕著となり、しわ寄せを被った人々の怒りの矛先がGlassに向けられているという側面もある。Glassをかけて街を歩くと攻撃される可能性があるというリスクを覚悟する必要がある。

そこまでしてGlassを購入させ試用させるからには、購入者にはそれに見合うだけのメリットがきっとあるに違いない。それを検証すべく、この機にGlassを購入してみた。現時点で利用可能なさまざまな機能やサービスなどを試してみた。本稿ではその結果を、使用感や課題などとともにできるだけ具体的に報告することとしたい。

主な登場者 Google Explorer

キーワード Glass ウェアラブル端末 拡張現実

地域 米国

Title	Trying Out Google Glass
Author	TAKAHASHI, Yoichi Research Fellow, KDDI Research Institute
Abstract	<p>On April 15, 2014, Google made its wearable computing device, Google Glass, available to the general public for one day only, even though the eyeglass-type device is still under development. It was odd that the device was sold to the public at the high price of \$1,500, considering that it is not a final version, and is still in a beta testing supposedly with lots of bugs and limited availability of services and functionality. In addition, those who purchased Google Glass are called “Explorers” and are expected to try it out, give feedback to Google and contribute to further development/improvement of the product without any compensation.</p> <p>Furthermore, Glass wearers have recently been continually experiencing disturbing incidents, such as being assaulted or having their devices ripped off from their faces on the street. The reasons for such assaults are not only from the feeling of discomfort, but also from the antipathy toward the prosperous high-tech companies which have caused widened social disparity and gentrification. Glass has now become a symbol for such techie companies, and a target of anger for those who feel victimized by the technology. The Glass wearers should be well aware of such risks as being assaulted while walking on the street.</p> <p>In this research, the author proposes a hypothesis that there should be some benefits to the Glass wearers to justify such costs and risks associated with purchasing and wearing Glass, and actually purchased and tried out Glass to verify the hypothesis. This report shows the result of the trial use, illustrating the features and applications currently available with Glass along with usability and areas for improvement, trying to go into specific detail as far as possible.</p>
Keyplayers	Google Explorer
Keywords	Glass wearable device augmented reality
Region	U.S.

1 Google Glassの1日限定販売

2014年4月15日、奇しくも米国の所得税確定申告の締切日、Googleは現在開発中のメガネ型ウェアラブル端末「Google Glass」の1日限りの一般販売を実施した[☞]（[脚注](#)）。

それまでは特に選ばれた、限られた人しかGlassを手にすることができなかったのだが、その日だけは米国に住んでいる18才以上の人なら誰でも購入できた。

ただしGlassの正式版はまだ出ていない。一般販売で売り出されたのは「Glass Explorer Edition」というベータ版だ。価格は一式1,500ドルと、非常に高い。正式版になればその半額以下になるだろうとの予想もある。

ベータ版のGlassを購入した人は「Explorer」と呼ばれ、試用してGoogleにフィードバックし、Glassのさらなる開発・改良に貢献することが期待されている。

まだバグも多数あるだろうし使えるサービスや機能も限られているというのに、そんなベータ版を正式版よりも高く販売するとは異例だ。それを買おうという一般人がどれだけいるのか、甚だ疑問だ。

さらに最近、Glassをかけて街を歩いていたら襲われた、Glassを奪われたなど、物騒な事件も多発している。攻撃の理由は単なる不快感だけではない。IT企業の興隆とともに社会の格差拡大が顕著となり、そのしわ寄せを被った人々の怒りの矛先がGlassに向けられているという側面もある。トラブル防止のため店内でのGlass着用を禁止しているバーやレストランなどもあるという。

良くも悪くも話題となっているGlass。課題を抱えたまま一般販売をするとは、Googleはいったいどういうつもりなのだろうか。

きっと何か深謀遠慮があるに違いない。1,500ドルも支払わせて、しかも無報酬で開発の手伝いをさせて、街で攻撃されるリスクまで背負わせて、それだけで終わりというはずがない。何かそれに見合うだけのメリットをもたらしてくれるはずだ。

それを検証すべく、この機にGlassを買ってみた。

2 Google Glassの歩み

ところで今回一般販売されたGlassは、ベータ版とは言っても一般の人々に有償で販売する以上、ほぼ完成品に近いはずだ。いつ正式販売に踏み切ってもおかしくは



[☞]（脚注） 2014年5月13日からは期間を限定せずに在庫がある限りの一般販売を開始した。価格は、限定販売のときと同じ1,500ドル。

ない状態のものであるはずだ（と信じたい）。何しろこれほど高価な上、もう2年以上も前にプロトタイプはできあがっていたのだから。

GoogleのGlass開発プロジェクト「Project Glass」は、無人自動運転車の開発にも取り組んでいる未来技術の研究部門「Google X」が手がけている。2012年4月、それまで秘密裏に開発が進められてきたGlassが初めて公にされた。その時点では、既に現在のものとほぼ同じ試作品ができ上がっていた^④（脚注1）。

2012年6月にサンフランシスコで開催されたGoogleの開発者向けコンファレンス「Google I/O」で、開発者2,000人を対象にGlass Explorerプログラムへの申込みを受け付けた。これは事実上、Glassの予約注文を受け付けたものだ。

さらに2013年2月、予約注文の受付枠を拡大し、追加で8,000人が予約できるようになった^⑤（脚注2）。ただしこれは申し込みば早いもの順に予約できるという単純なものではなかった。「もしもGlassがあったなら」というテーマでGlassの活用方法に関するアイデアを50語以内にまとめ、「#ifihadglass」というハッシュタグを付けてGoogle+またはTwitterに投稿し、審査を経て入賞したらやっと予約できるというものだ。しかも入賞したからと言ってGlassが無料でもらえるわけではない。単に1,500ドルで買える権利が与えられるというだけだ。

2013年5月、最初に予約していた2,000人の開発者の手にGlassのベータ版「Glass Explorer Edition」が渡った^⑥（脚注3）。価格は1,500ドル。そんな大金を払いたくはないと思えば辞退することもできたが、この開発者たちは本気でGlassのアプリやサービスなどを開発しようとしている人たち。おそらくほとんどの人が購入したことだろう。

次いでアイデアコンテストで入賞した8,000人にも販売された。この人たちの中には開発者や専門家だけでなく一般の人たちも含まれていた。1,500ドルという価格は普通はなかなか簡単に出せる金額ではない。入賞はしたものの、資金がなくて買うのを諦めた人もいたようだ。

Glassの購入資金を工面するために、クラウドファンディングのKickstarterで資金集めをしようとした人もいた^⑦（脚注4）。調達期間は2013年4月16日から1か月間。目標



^④（脚注1）

http://money.cnn.com/2012/04/04/technology/google-project-glass/?source=cnn_bin

^⑤（脚注2）

<http://www.slashgear.com/8000-more-google-glass-wearables-on-offer-for-creative-developers-20270204/>

^⑥（脚注3）

<http://techcrunch.com/2013/05/16/google-has-now-invited-all-2000-people-who-signed-up-at-last-years-io-to-pick-up-glass/>

^⑦（脚注4）

<https://www.kickstarter.com/projects/1098002504/scarlet-fever-jumping-a-new-horse-a-google-glass-v?ref=live>

額1,500ドルのところ、支援者は1人、調達額は5ドルという惨憺たる結果に終わった。「ウチの娘が乗馬をしながらGlassでビデオ撮りしたいと言うので」という理由ではなかなか共感を得るのが難しかったようだ。

2013年10月、GoogleはそれまでGlassを試用していたExplorerたちからのフィードバックを考慮して、Glassのハードウェアを改良した^④（脚注1）。本体をそれまでのものより少し大きくした。また音が聞こえにくい、周囲に漏れるなどの問題を解決するため、モノラルのイヤホンも開発した。矯正レンズが必要なユーザにも対応できるようにした。

同11月、GoogleはExplorerの陣容を拡大すべく、ウェイティングリストに登録していた開発者たちに招待状を送付した。さらに同12月から2014年2月までの間、既存のExplorerたちに対し、本体を新バージョンに無償で交換する措置を実施した。

同12月にはGlassのソフトウェアの大幅なバージョンアップが実施された^④（脚注2）。ウインクすると写真が撮れるなど、いくつかの特徴的な機能が追加された。

2014年4月14日、1日限りの一般販売の前日、Glassはさらに改良がほどこされた。Android 4.4 (KitKat) にも対応し、バッテリーの持ちも多少向上した。Explorerたちからのフィードバックを考慮して、写真のバンドル化（後述）も導入した。一方、フィードバックで散々な悪評を買ったビデオ通話機能は削除した。

Glassは大要このような経緯で、開発者や専門家や一般の人たちからなるExplorerたちに支えられながら、かなりの期間にわたる試用と改良を経て現在に至っている。正式版は2013年中に出ると言われていたが実現しなかった。今のところ2014年後半には出る予定になっている。



④（脚注1）

<http://androidcommunity.com/google-glass-shows-off-version-2-0-hardware-20131029/>

④（脚注2）

<http://techcrunch.com/2013/12/17/google-glass-gets-lock-screen-youtube-uploading-hangouts-chat-and-wink-to-shoot-picture-mode/>

3 Google Glassを使ってみた

3-1 Glassを注文してみた

4月15日、米国西海岸は午後1時。販売開始から5時間経っていたが、Glassの販売サイト^(脚注)はまだ注文を受け付けていた。どの色も売切れの表示は出ていなかった。

まずは本体の色を選ぶ。チャコール（黒）、タンジェリン（赤）、コットン（白）、シェイル（グレー）、スカイ（青）の5色の中から選べる。サングラスにしたときにマッチするようチャコールを選んだ。

【図表1】 本体カラーの選択画面

Glass Explorer Edition

\$1500

Glass is a lightweight wearable technology that you can customize with different shades, frames and earbuds.

Tech specs. Comes with:

- Cable and Charger
- Mono Earbud
- Pouch
- Your Choice of Shade or Frame



Step 1. Select your color

Charcoal



(Glassの販売サイトより、以下【図表4】まで同じ)

度付きレンズをはめることのできるフレームとサングラスに変身させることのできるシェードも選べる。

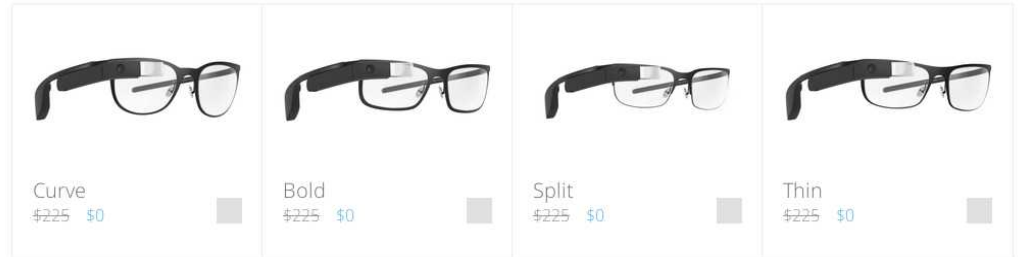


^(脚注) <https://glass.google.com/getglass/shop/glass>

【図表2】 フレームの選択画面

Step 2. Select your complimentary accessory

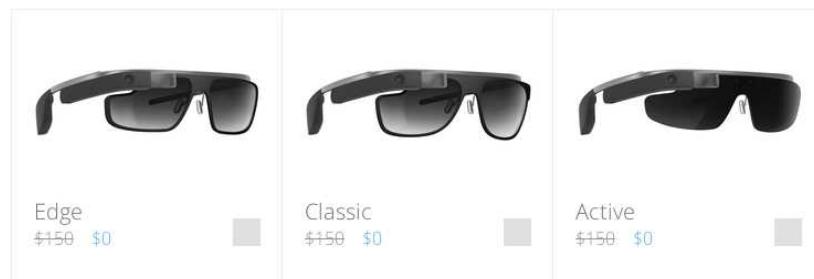
Frames

Four feather-light titanium frames that you can have fit with your prescription or no prescription at all. Each comes with a protective case. [Learn more](#)

フレームは通常225ドル、シェードは通常150ドルのところ、今回はいずれも無料になっている。

【図表3】 シェードの選択画面

Shades

Glass Shades feature polarized, impact-resistant lenses from Maui Jim and Zeal Optics. They twist on and off Glass when you aren't wearing frames. [Learn more](#)

選択画面ではフレームかシェードのどちらか1つを選ぶようにとは書いていなかったのので、薄型の「Thin」フレームとスポーツタイプの「Active」シェードの両方を選択してしまった。後になってどちらか1つしか選べないことがわかった。


選択後、「カートに入れる」ボタンを押してチェックアウトした。カートの中には本体とイヤホンなどの付属品の他にシェードも入っていたが、フレームは入っていなかった。先にフレームを選び、次いでシェードを選んだため、後で選択したシェードが優先されたようだ。

カートの中味が表示されている画面には、Google Walletのマークのついた「Buy with Google」というボタンがあった。これを押すと支払いの画面になった。Google Walletにあらかじめ登録していたクレジットカードが表示されていた。ここで別のクレジットカードを登録することもできる。

クレジットカード情報を確認し、配達先の住所を入力し、支払いボタンを押すと注文が完了した。送料や手数料はかからなかったが税金が135ドルも取られ、総額は1,635ドルとなった。当地の消費税の高さを改めて痛感した。

【図表4】注文完了後の画面

Thank you for your order.

Order Placed On Tuesday 15th April, 2014 Status Pending  <small>If you need to change the shipping address you'll need to cancel and re-order.</small>	Glass Explorer Edition \$1,500.00 <small>Charcoal Glass, Mono Earbud, Pouch, Cable & Charger Active Shade</small>					
	<table> <tr> <td>Subtotal</td> <td>\$1,500.00</td> </tr> <tr> <td>+ Tax</td> <td>\$135.00</td> </tr> <tr> <td>Total</td> <td>\$1,635.00</td> </tr> </table>	Subtotal	\$1,500.00	+ Tax	\$135.00	Total
Subtotal	\$1,500.00					
+ Tax	\$135.00					
Total	\$1,635.00					

翌4月16日、Glassを発送したとの連絡がメールで来た。迅速な対応だ。UPSのトラッキング番号もあったが、トラッキングしても「該当なし」と表示された。まだトラッキングシステムには反映されていないようだ。

その翌日の4月17日、UPSの配達員が箱を抱えてやって来た。トラッキングをする暇もなく品物が届いてしまった。米国の配送業者は荷物によっては玄関前に置き去りにしていくこともあるが、今回は受取りのサインが求められた。

3-2 包装は正式版

Glassの本体と付属品は高級和菓子の折詰のようなしっかりした白い箱に収まっていた。ちょうど羊羹が2本入っていきそうな大きさの箱だ。本体はまだベータ版だが、少なくとも包装に関しては正式版と言っていいほど完成度が高いとの印象を受けた。その上、さまざまな工夫が凝らされていた。

箱の蓋を開けると半透明の紙のカバーが貼ってあり、それをはがすと厚紙の台紙に収まった本体が現れた。台紙は本体がぴったりと収納できるように本体の突起部分に合わせた型抜きがしてある。さらに台紙には本体の主要部分の位置と名称が記されていた。台紙が説明書も兼ねるというわけだ。

【図表5】 箱に収まった本体と蓋



(筆者撮影)

蓋の内側にも説明があった。「さあ、始めよう」という見出しで、電源の入れ方、鼻パッドの調整の仕方、ディスプレイ位置の調整の仕方が図入りで簡明に書いてある。蓋も説明書を兼ねるとは効率的だ。

本体を台紙ごと箱から取り出すと、その下にポーチが現れた。**Glass**を持ち歩くときのための専用ポーチで、**Glass**の本体がすっぽり収まる。ポーチにはリサイクル素材から作った日本製のマイクロファイバでできているとの説明のあるタグが付いていた。品質の高さを感じさせる。

ポーチの底は硬いメガネケースを半分にしたような構造になっていて、**Glass**本体をしっかり保護できるようになっている。ちなみに**Glass**はフレームが折りたためないので持ち歩くときは結構かさばるのを覚悟する必要がある。

ポーチの中には黒い厚紙の台紙に収まったモノラルのイヤホンが入っていた。イヤホンはコードが5センチくらいの小さなものだが、ポーチの内法ほどの大きさの台紙を独り占めしていた。台紙はイヤホンが行方不明にならないように、またポーチが型くずれしないようにする役割を果たしている。この台紙もまたイヤホンの簡単な説明が記載され、説明書の役割も兼ねていた。

このイヤホン自体がまた、一工夫凝らされている。コードを少しイヤホン側に押し込むとコードがたるんで小さいループができる。このループの大きさを耳穴の形にぴったり合わせると耳にフィットし、耳穴に深く押し込まなくても外れにくくなるように工夫されている。

【図表6】 ポーチと台紙に収まったイヤホン



(筆者撮影)

ポーチを取り出すと、その下に充電器、USBケーブル、説明書などの付属品が、やはりしっかりした台紙に収まっていた。台紙というよりは箱の底面そのものだったが、分厚く硬い紙でできており、それぞれの付属品の形にくり抜かれてぴったり収まるようになっていた。

充電器とUSBケーブルのコネクタ部分は上下（または左右）の向きがわかるように、白と黒の2色刷りになっている。USBケーブルを差し込むときは、よく確かめずにやると向きが合わず、ひっくり返して差し直さないといけないことが多い。GlassのUSBケーブルを充電器に差すときは互いの色を合わせればよいようになっているので間違えようがない。ここにも細かな気配りが感じられる。

説明書（と言っても簡単なQ&A）の入っていた小さな紙箱の中には、鼻パッドの予備が大小それぞれ1組ずつ入っていた。それにメッセージカードが添えられていた。

「貴方は可能性のパイオニア、創設者、そして立役者です。貴方はGlass Explorerです。私たちの目の前にはエキサイティングな旅が待ち受けています。次に起こること、それは貴方から始まります」

ここでExplorerとしての心構えが叩き込まれる。GoogleはGlassを試用する人たちをExplorer、すなわち探検家と呼んでいる。これからGlassが演出する探検の旅に参加する人たちだ。途中で猛獣などに襲われるかもしれないが、探検なのだからやむを得ない。新たな発見のために多少の危険も顧みず、果敢に挑戦することが求められている。

3-3 セットアップは知らぬ間に

まずは本体を充電してから電源を入れてみた。AndroidスマホかiPhoneを持っているならMyGlassアプリをダウンロードするようとの指示が出た。セットアップはこのアプリでもできるが、Webサイト (glass.google.com/myglass) 上でもできるようになっている。

セットアップと言っても、それほど面倒な作業はなかった。ほとんど自動的に認識してくれ、Glassやアプリに言われるままに操作しているうちに知らない間に終わってしまったという感じだ。何をやったのか自覚さえないくらいだ。おそらく重要な部分はGlassとスマホをBluetoothでペアリングすることと、Wi-Fiの接続設定をすることくらいだろう。

事前にネットで調べた際には、セットアップで苦労したという話や、Wi-Fiの接続設定の際にパソコンでQRコードを表示させてそれをGlassのカメラで撮影するのが困難だったなどの情報があったので心配したが、そのような場面には出くわさなかった。環境によって手順が違うのかもしれない。

ところでGlassの通信機能は今のところBluetoothとWi-Fiだけだ。Wi-FiのないところではスマホのBluetoothテザリング機能をオンにすれば、スマホを介してネットに接続できるが、そうでないとネットにはつながらない。まだまだスマホなしでGlassだけが立ちできる状況ではない。

3-4 まずは装着できるかが心配

Glassの購入を決める前に一番気がかりだったのが、普通のメガネをかけたままGlassを装着できるのかということだった。筆者は近眼のためメガネが欠かせない。試しにメガネをかけないでGlassを着けてみたら、ディスプレイがぼやけて文字がまったく読めなかった。Glassには視度調整の機能はない。

そんな人のためにGlassには矯正レンズがはめられるフレームが用意されている。視力が悪い人はフレームを入手してメガネ屋さんに行って矯正レンズを入れてもらうという手がある。

ただ、これには費用がかかる上に大きな問題がある。映画館などGlassを着用するのが適切でない場所に入るときに外すことができなくなる。外すと映画が見えなくなってしまう。Glassのスイッチを切って、純粋にメガネとして使うのだと言っても信じてもらえない確率が高い。スイッチを入れようと思えばいつでも簡単に入れられるので、もしこれが許されると悪用される可能性もある。

やはり必要に応じて着けたり外したりできるようにしないと何かと不便だ。何とか既存のメガネと両立してほしいと願うのみだ。もし両立できなければメガネをコンタクトレンズに変えるか、Glassを諦めるか、大きな選択が迫られることになる。

事前にネットで調べたところ、メガネをかけても**Glass**を着けられるという情報と着けられないという情報があり、否定的な情報が多いようだった。メガネの大きさや形状にもよるだろうから、結局はケースバイケースということになる。

まずはメガネをかけたまま**Glass**を着けてみた。メガネのフレームが邪魔になり**Glass**が奥へ入らない。**Glass**がメガネのレンズより2-3センチ前に突き出てしまう。**Glass**の鼻パッドがメガネのフレームにぶつかってそれ以上奥へ入って行かないようだ。

Glassのフレームはチタン製で、柔軟で強靱なのでどんなに曲げても大丈夫だと書いてあった。**Glass**の鼻パッドをつまんで間隔を狭めてメガネの鼻パッドの間に入れてみた。カチッと音がしてうまく間に入り、**Glass**が奥に入った。

まだフレーム同士が干渉して落ち着かない。**Glass**のフレームはメガネのフレームの上に乗っかっている状態だった。ディスプレイがやや右上がりに傾いている。**Glass**のフレームは右側が太くなっているため、**Glass**のフレームをメガネのフレームの上に乗せると**Glass**の右側だけが上がってしまいディスプレイが斜めになってしまう。

Glassのフレームの右側がメガネのフレームを外側から覆うように重ねてみると、ディスプレイが水平になった。**Glass**の鼻パッドがメガネの鼻パッドの間に入ってうまく引っかかっているので、多少頭を振っても**Glass**がずれたり外れたりしない。見た目はともかく何とか着用には成功したようだ。

【図表7】メガネと**Glass**が両立した



(筆者撮影)

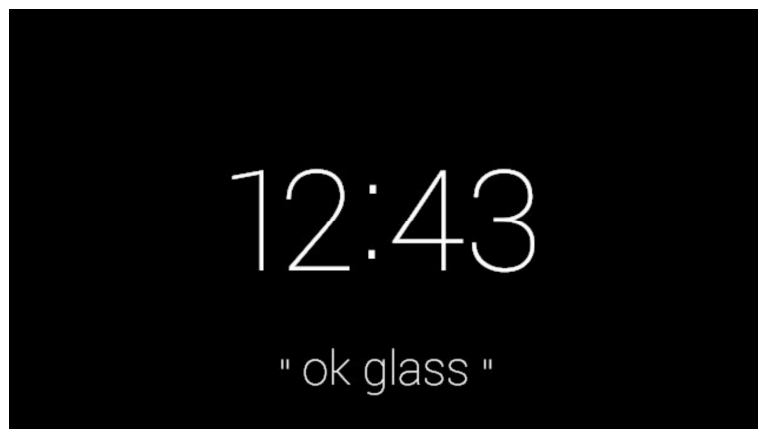
次に**Glass**をサングラスにするための専用のシェードを付けてみたが、これはどうやってもうまく行かなかった。シェードはスポーツタイプのため、顔にフィットするよう湾曲している。メガネは直線的なので、シェードとは相容れない。シェードはメガネに邪魔されて、中央部分が2-3センチ前に飛び出してしまう、それ以上奥に

入らない。スポーツタイプでないシェードなら何とかあったかもしれない。結局メガネとシェードの両立は今後の課題となった。

3-5 スタートは「ok glass」

電源が完全に切れている状態から電源ボタンを押すとディスプレイにGlassのロゴがしばらく表示された後、現在時刻と「"ok glass"」の文字が表示される。これがホーム画面だ。

【図表8】 ホーム画面

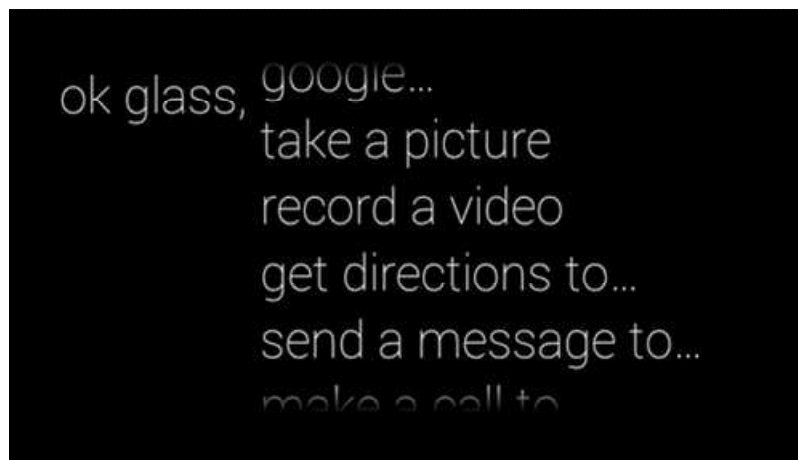


Glassにはキーボードもマウスもない。右目の前方の空中にディスプレイが浮かぶ。それを指で直接タッチするわけにもいかない。それでもメールやメッセージを送受したり、写真やビデオを撮ったりシェアしたり、電話をかけたり受けたり、Webサイトを閲覧したりと、スマホでできる多くのことができるというから驚きだ。どうやってそれを可能にするのか、それがGlass購入前の疑問点だった。

Glassを操作する方法はいくつかあるが、手を使わなくてもいろいろなことができるというのがGlassの大きなメリットだ。特に音声でコントロールできることが特徴的な機能だ。音声でどこまでできるのか、これが1つの確認ポイントだ。

まずはホーム画面で「ok glass」と発声する。これが音声コマンドのスタート合図となる。すると音声で操作可能な項目のメニューが一覧で表示される。

【図表9】 音声で操作可能な項目



音声コマンドで可能な操作として、**Google**検索、写真撮影、ビデオ撮影、道順入手、メッセージ送信、電話発信という**6**項目が表示されていた。音声だけでこれだけのことができるようだ。画面の上下が切れているが、頭を上に向けると上の部分が完全に表示され、下に向けると下の部分が現れる。直感的なインターフェースだ。

他にも手を使わないでできる操作方法として、頭を使う（物理的な意味で）、ウインクするというものもあるが、これは今のところできる操作が限られている。頭を上に向け（角度は設定可能）とウエイクアップ、下に向けるとスリープ、右目をウインクすると写真が撮れるというくらいのものだ。

それ以外のことはだいたい手を使うことになる。主要な操作としては、タッチパッドやボタンを指で触るという方法がある。フレームの右側の前方角から中央付近までのやや太い部分の側面がタッチパッドになっている。タッチパッドの後方内側に電源スイッチのボタンがある。さらにフレーム上部の右前の角付近にカメラボタンがある。

タッチパッドは指の本数や動かし方によっていくつか違った働きをする。タッチパッドの側面を1本指でタップすると「ウエイクアップ/選択（スリープ状態でタップするとウエイクアップ、メニューが表示されている状態でタップすると選択）」、1本指で後方から前方に向かってスワイプすると「次（右）の画面」、前方から後方に向かってスワイプすると「前（左）の画面」、1本指で上から下にスワイプすると「バック/スリープ（1つ前の状態に戻り、最後まで行き着くとスリープ）」、2本指で上から下にスワイプすると「スリープ」、というのがおおよその基本操作だ。

ホーム画面は横方向のタイムラインになっている。最初に現在時刻が表示され、タッチパッドを前方にスワイプすると、ホーム画面の右側にある情報が次々と表示されるが、これは過去に行った行動が記録されていて、時系列で出てくる。何時間前に写真を撮った、電話をかけて何分話した、メールを送った、**Google**で検索した、アプリをインストールしたなどの履歴や画像などが表示される。

撮った写真に関しては、以前はタイムライン上に1枚ずつ表示されたが、それだと1度に大量に写真を撮ると、タイムライン上で1枚ずつ全部の写真を見終わってからでないと次の履歴が出てこないという不都合があった。

これでは不便だとのExplorerからのフィードバックを考慮し、2014年4月のバージョンアップでは、1日ごとに写真をバンドル化し、まず数枚の写真を1枚のカードにまとめたカバーページを表示し、それをタップすると写真が1枚ずつ表示されるようになった。これにより、写真を見る必要がない場合は1回のスワイプで次の履歴に移れるようになった。

現在時刻の画面からタッチパッドを後方にスワイプするとホーム画面の左側にある情報が出てくる。これは現在や未来に関する情報だ。予定表、株価や天気などの情報が表示される。さらにスワイプして一番左端に行き着くと設定画面になる。

設定画面の最初のページではバッテリーの残量や接続状況などが表示される。タップするとW-Fiの接続情報が出た。スワイプすると次ページ以降の画面が表示され、Bluetoothの接続状況、本体のバージョン（XE17となっていた）とシリアル番号、自動バックアップの状況などを確認することができる。

頭を上に向けてウエイクアップする場合の角度の調節もここでできる。角度は10度から40度まで設定可能で、頭を動かすと角度が変わる（上を向くと40度の方へ、下を向くと10度の方へ1度単位で変わる）ので、設定したい角度のところをタップすると設定が完了する。

またウインクのキャリブレーションやスピーカーの音量的設定などもここでできる。さらにGlassを外すと自動的に電源がオフになるように設定することもでき、それもこの設定画面で有効にしたり無効にしたりすることができる。

3-6 写真を撮ってみた

Glassのカメラは画素数が5メガピクセル。最新の高性能スマホに比べると少々見劣りがするが、ソフトウェアで補って光量不足などを自動的に認識して明るく鮮明な写真が撮れると謳っている。確かに暗いところでも結構きれいに写真が撮れる。

写真を撮ることのできる操作方法はいくつかある。音声で指示する、右目でウインクする、カメラボタンを押す、メニューを選んでタップするという4通りもある。

手を使わなくても操作できるというGlassのメリットは写真撮影でも威力を発揮する。音声コマンドだけで写真を撮ることができる。ホーム画面で「ok glass」と発声し、「take a picture」と音声で指示するとシャッターが押される。「a」を除いて「take picture」でも通じる。

撮った写真は数秒間、「ok glass」の文字とともに表示される。「ok glass」の表示は音声による操作が可能であることを示す。「ok glass」と発声すると、写真を送ることのできる「send it to」と、共有することのできる「share with」という2つの

メニューが表示される。

「send it to」と指示すると、送り先の候補者の氏名が表示される。ここではあらかじめスマホのMyGlassアプリで登録したコンタクトリストのうち、写真を送ることができる相手先が表示される。送りたい相手の名前を言うとあらかじめ指定したメールなどの方法で写真が送られる。

「share with」と指示すると、撮った写真をGoogle+に投稿して共有することができる。あらかじめGoogle+で共有グループを作っておくと、それに応じたメニューが表示され、共有するグループを音声で指定することができる。

なお、写真を撮った後、何も指示しないと写真はGlass本体に保存されるとともに、後述のGoogle Driveにも自動的にバックアップ保存される。またGoogle+の自分のページにも、誰とも共有しない形で自動的に投稿され、後日共有することも可能だ。

写真を撮りたいときに、音声を発するのが憚られることもある。例えば図書館など静かだけれど周りに人がいる場合など。そういうときは指を使った方がいい。ホーム画面でタップすると、利用可能なメニューが1つずつ表示されるので、前方にスワイプして「Take picture」という項目が表示されたらタップして写真を撮ることができる。細かい話だが、音声コマンドのときのメニューは「take a picture」だったがタップするときは「Take picture」となっている。この違いは何か理由があるのか、単に作りが雑なだけなのかは不明だ。

もっと簡単に写真を撮るならカメラボタンを押すという方法がある。電源が完全にオフのとき以外、どんな状態でもカメラボタンを押すと写真が撮れる。たとえばディスプレイで地図やWebサイトを見ていたとしても、カメラボタンを押すとその瞬間にカメラが捉えていたものを写真に撮ることができる。本体がスリープの状態でもカメラボタンを押すと写真が撮れるのは便利だ。

最後に右目でウインクする方法。これは音声コマンドと同様、手を使わなくても写真が撮れるという、Glassならではの特徴的な機能だ。しかもウインクという簡単で瞬間的な動作で写真が撮れるというのは画期的に便利だ。

ディスプレイの付け根付近の内側に右目の動きを感知するセンサーがある。あらかじめキャリブレーションしてウインクを登録しておく必要がある。登録した後、写真を撮りたいときに右目でウインクすると写真が撮れることになっている。

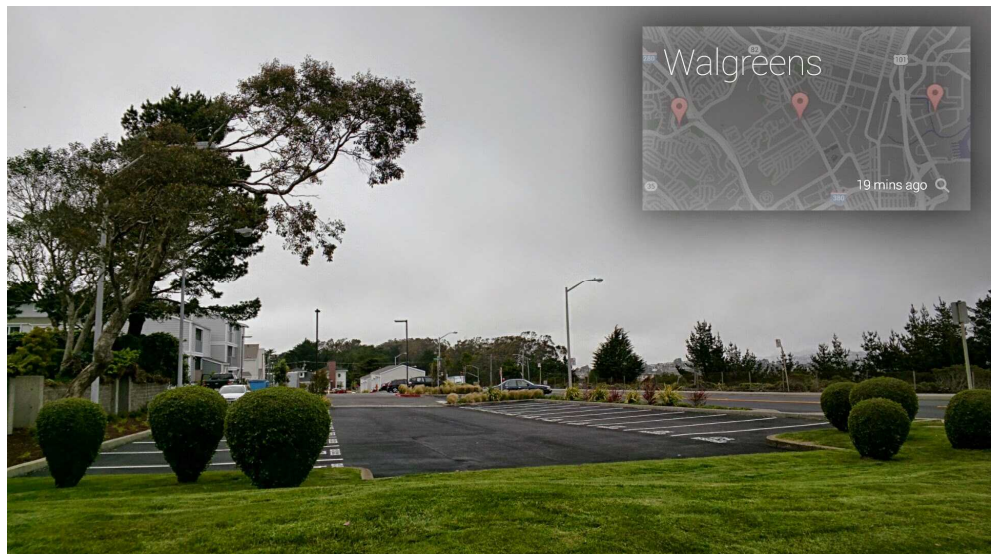
撮れるはずなのだが、これがなかなかうまくいかない。ウインクの仕方が悪いのか、センサーの感度がイマイチなのか、なかなか1回で撮れた試しがない。感度を高くすると通常の瞬きでも写真が撮れてしまうので、わざと感度を低くしているのかもしれない。何度かウインクしてやっと1回シャッターが切れるという始末。慣れないうちにはシャッターチャンスを逃す確率が高そうだ。

なお、Glassのサポートページでは、ウイंकするときの注意事項がある^④（脚注）。特にウイंकする対象や周囲に十分気をつけるようにと注意喚起している。ウイंकの持つ意味を十分に理解し、視線の先にいる人や周辺の人に余計な誤解を与えないようにすることが大切だ。

3-7 ビグネットが面白い

Glassで撮った写真にディスプレイ情報を組み合わせる「ビグネット」が面白い。たとえばディスプレイに表示されている地図を写真に組み込みたいときは、ディスプレイに地図が表示されている状態で、カメラボタンを押して写真を撮り、その後撮った写真と「ok glass」の文字が表示されている間にタップすると、「Make vignette」というオプションが出る。さらにタップすると撮った写真の右上にディスプレイの画像が重なった【図表10】のような写真ができあがる。

【図表10】 ビグネットを作成してみた



この機能により、説明や関連情報が付加された写真を簡単に作ることができる。拡張現実を写真にしたような感じになる。本稿のような原稿を書いたり資料を作ったりするときには非常に便利な機能だ。

3-8 Googleのサービスに取り込まれる

Glassは当然ながらGoogleのサービスやプラットフォームと非常に相性がいい。



^④（脚注） https://support.google.com/glass/answer/4347178?hl=en&ref_topic=3079640

Glassで撮った写真はGoogleのクラウドサービス「Google Drive」に自動的にバックアップされ、スマホやパソコンなどからもアクセスできるようになる。

撮った写真を共有したりパソコンに取り込んだりするにはGoogle+が便利だ。Google+の自分のページを開くと撮った写真が既に自動的にアップロードされており、閲覧や共有やパソコンへの保存などが簡単にできる。なおGlassで撮った写真には「#throughglass」というハッシュタグが自動的に付与されている。

無理にGoogle+を使わなくても、撮った写真はとりあえずGlassの本体に保存されるので、充電するときに使うUSBケーブルを使ってGlassをパソコンにつなぎ、Glass本体の写真をパソコンに取り込んで保存や共有をすることもできる。しかしGoogleのさまざまなサービスを使いこなすことができれば、ずっと便利で簡単にいろいろなことができるようになる。

実は筆者は今までGoogle+やその他のGoogleのサービスはあまり使っていなかった。Gmailはたまに使っていたが、Google+はほとんど使ったことがなく、Google Now、Hangoutなどになると、何が何だかわからない。Glassを使い始めたことで、Googleのサービスを否応なく使うよう迫られている感じがする。次第にGoogleのサービスやプラットフォームに取り込まれることになりそうだ。

3-9 ビデオを撮ってみた

Glassでは720pのHDビデオを撮影することができる。Glassでビデオ撮影をするメリットは両手が自由になることだ。何か両手を使う作業をやりながら、その手順や状況を作業者の視点からビデオに収めるというときには打って付けの手段だ。

ビデオを撮影する場合は写真と同様、いくつかの操作方法があるが、ウインクだけはビデオではできない。音声コマンドの場合はホーム画面で「ok glass」と発声し、「record a video」と音声で指示するとビデオ撮影が始まる。他にタップ・スワイプで「Record video」を選択してもいいし、カメラボタンを長押しすることでもビデオ撮影ができる。

デフォルトでは10秒間撮影するとビデオが自動的に終了する。もっと長く撮影したい場合は、最初の10秒の間にカメラボタンを押すか、タップして「Extend video」が表示されたらもう一度タップすれば、10秒経過後も撮影が継続される。継続された後は、終了しない限りいつまでも撮影が続く。と言っても、本体をフル充電した状態で1時間位ビデオを撮影するとバッテリーがなくなってビデオは終了する。撮影中のビデオを途中で終了したいときはカメラボタンを押すか、タップして「Stop video」が表示されたらもう一度タップするといつでも終了できる。

撮ったビデオは写真と同様、音声やタップの操作で友人などに送ったりシェアしたりすることができる。動画ファイルはGlass本体に保存されるとともに、Google Driveに自動バックアップされる。またGoogle+に自動的に投稿されるが誰とも共有されず、自分だけが閲覧できる状態になっていて、後日必要に応じて共有できると

いう点も写真の場合と同じだ。

3-10 電話を使ってみた

電話をかけたり受けたりする操作も手を使わないでできる。電話をかけるときは、ホーム画面で「ok glass」と言った後、「make a call to」と音声で指示すると、電話をかける相手先候補の氏名が表示されるので、かけたい相手の名前を音声で指示すればいい。

音声コマンドを使う代わりにタップ・スワイプして「Call」メニューを表示させてタップすることでも電話をかけることができる。

スマホに電話が着信すると、Glassのディスプレイに「Incoming call」というメッセージと「ok glass」の文字が表示される。「ok glass」と言うと、電話に出る「answer call」と電話に出ない「decline call」の2つのメニューが表示される。「answer call」と音声で指示すると電話がつながる。

電話を切るときは音声コマンドではできないので、タップして「End call」というメニューが出たら、さらにタップすると電話が切れる。切るときは相手に切ってもらえば、こちら側はタップする必要はないので、わざわざ音声コマンドで切れるようにする必要はないのかもしれない。

なおSkypeやLINEなどのネット電話に関しては、GlassはスマホのBluetoothヘッドセットとして機能するのみで、電話をかけたり受けたり切ったりする操作は一切できない。

電話やSMSはGlass自体にその機能があるわけではなく、スマホの機能を使っていることから、Bluetoothでスマホとつながっていないと使えない。写真やビデオ撮影をするだけならスマホとつながってなくても、またWi-Fiでネットにつながってなくても可能だ。

Glassを通して電話をするときの通話品質は悪い。イヤホンをしない場合はスピーカーを通して音が聞こえるのだが、このスピーカーは骨伝導スピーカーになっており、音が小さくて聞きとりにくい上に周囲にもやや音が漏れる。これを改善するため、専用のイヤホンが開発された。一方、電話の向こうの相手は、こちらの声がかもったように聞こえ、非常に聞きづらくフラストレーションが溜まるようだ。

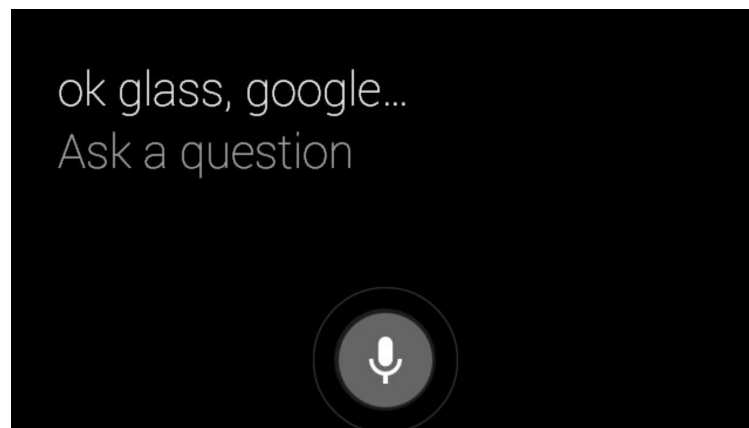
以前はGlassでビデオ通話もできたが、音声だけでも品質は良くないのに、ビデオまで使うと余計品質が悪くなり、使い物にならないということで、4月のバージョンアップではビデオ通話機能が削除された。

3-1-1 Webサイトを閲覧してみた

キーボードもマウスもないGlassでどうやってWebサイトを閲覧するのか^④(脚注)。これも最大の疑問の1つだった。まずは音声コマンドでGoogle検索をすることからスタートする。

ホーム画面で「ok glass」と発声するといくつかメニューが表示される中に「google」がある。「google」と言うとキーワード入力画面になる。これは音声コマンドでなくても、ホーム画面でタップし、必要に応じてスワイプして「Google」のメニューを表示させてからタップしても同じ画面になる。

【図表11】 キーワード入力画面



質問したいことや検索したい情報のキーワードを音声で発声すると検索結果が表示される。キーボードがないのでキーワードは音声で入力するしか方法がない。日本語は通じないが、「ラーメン」など英語でも一般的になっているものは検索できる。

試しに「ラーメン」と言ってみた。「llama」と聞こえたらしく、動物のラマの情報が出てきた。日本式の発音だったのがいけなかったようだ。写真とテキストが表示され、テキスト部分は自動的に音声で読み上げてくれた。



^④(脚注) Glassで使えるサードパーティ製のキーボードも登場した。

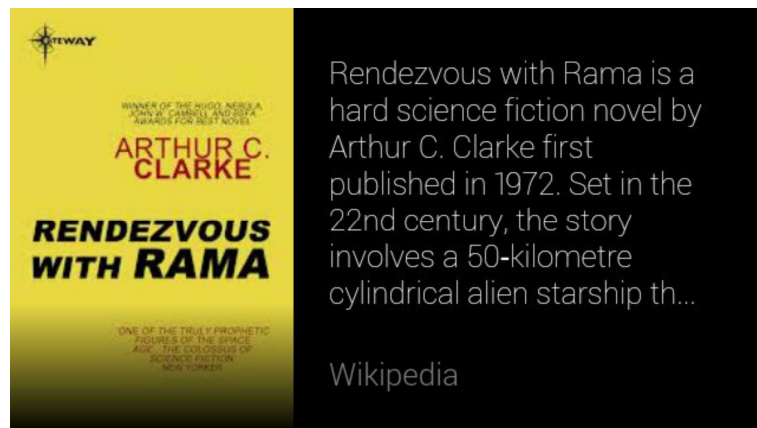
<http://techcrunch.com/2014/05/13/google-glass-gets-a-keyboard-thanks-to-minuums-minimal-tap-and-turn-typing/>

【図表12】 1回目の検索結果



もう一度キーワード入力画面に戻って「ラーメン」と言ってみた。今度は「Rama」と聞こえたらしく、SF小説の「Rendezvous with Rama」の情報が表示された。「L」と「R」の区別に気を取られて最後の「N」が弱くなってしまったようだ。これもやはりテキスト部分は読み上げてくれた。

【図表13】 2回目の検索結果



「今度こそ」と気を取り直して再度キーワード入力画面で「ラーメン^ぬ」と、最後の「N」を強調して言ってみた。やっとラーメンの情報が出了。目当ての情報にたどり着くまでに3回トライすることとなったが、考えてみれば自分の発音が悪かっただけで、Glassの音声認識はかなり正確にできているようだ。

表示される情報は1ページずつのカード形式になっており、タッチパッドを後方から前方にスワイプすると次々に別の情報のカードが出てくる。最初のカードは写真とテキストで構成されており、テキスト部分は自動的に読み上げてくれる。

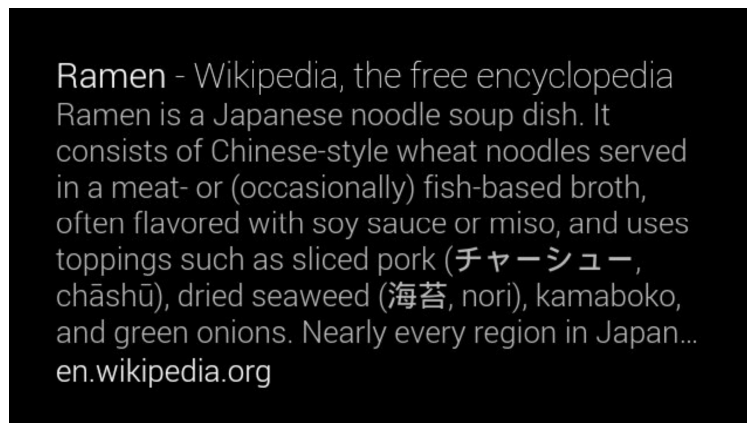
【図表14】 3回目の検索結果



最初に表示されたカードはパソコンなどでGoogle検索をしたときの検索結果のページの右側に出てくる要約情報のようだ。もとはWikipediaの情報だ。

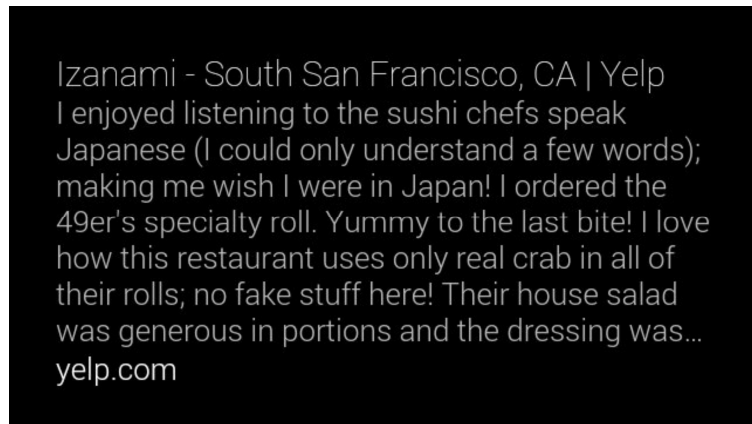
前方にスワイプすると次のカードが現れた。ラーメンとは何か、という説明文だ。Wikipediaの最初のパラグラフを引用したものだ。これはテキストのみで画像はない。これは自動的に読み上げてはくれない。

【図表15】 「ラーメン」 の検索結果の2枚目のカード



さらに前方にスワイプすると3枚目のカードが現れた。近所の日本食レストラン「Izanami」の情報が出了。レストランなどの口コミ情報サイト「Yelp」からの引用だ。近所でラーメンが食べられるお勧めのお店の情報が表示されたようだ。これもテキストのみで画像はない。自動的に読み上げてくれない。

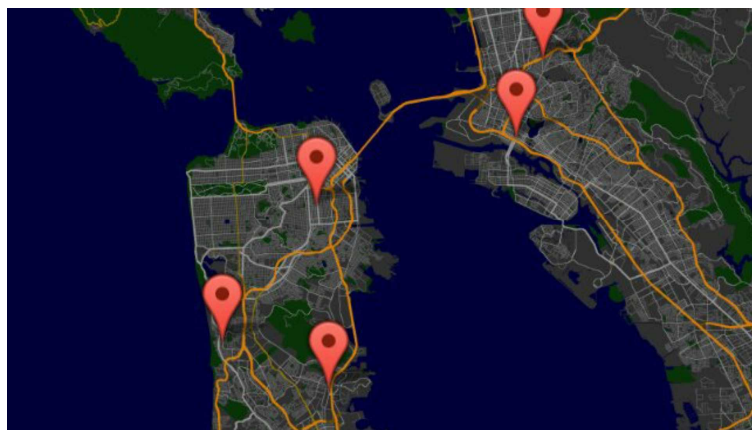
【図表16】「ラーメン」の検索結果の3枚目のカード



次にスワイプすると、もう1枚同様のテキストのみのカードが現れた。ラーメンが食べられるその他のお店の店名のみの情報だった。

さらにスワイプすると、サンフランシスコとその周辺の地図が表示され、位置を示すピンが立っている。これはラーメンが食べられるお勧めのお店の場所を教えてくれているようだが、特に説明はない。拡大して詳細な地図を表示したり、ピンを選択して詳細情報を表示したりすることはできないようだ。

【図表17】「ラーメン」の検索結果の5枚目のカード



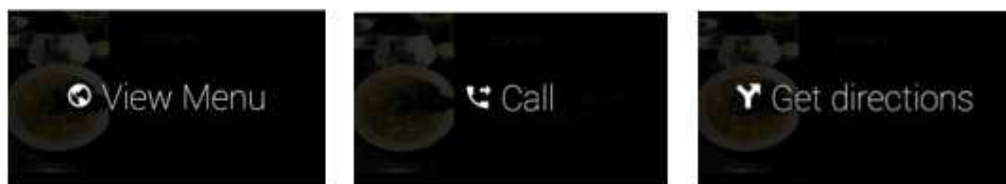
その次以降のカードはお店ごとの情報になっていた。写真、店名、住所、営業時間が表示されている。

【図表18】「ラーメン」の検索結果の6枚目のカード



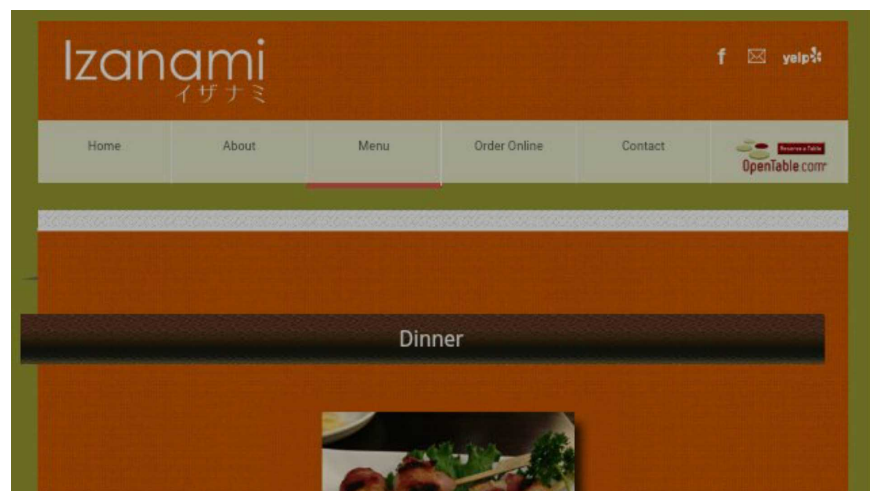
お店の情報が表示されている状態でタップすると、「View Menu（メニューを見る）」というオプションが表示され、前方にスワイプすると「Call（電話する）」、「Get directions（道順を入手する）」というメニューが順に表示された。それ以上スワイプしても先に進めなかったため、利用可能なオプションはこの3つだけなのだとわかる。

【図表19】お店の情報から利用できるメニュー



「View Menu」を表示させ、タップしてメニューを見てみる。お店のWebサイトのメニューページが表示された。ただしディスプレイに見えているのはWebページの上の方だけで、下の方が切れている。

【図表20】お店のメニューページ



Google Glass を使ってみた

前方にスワイプするとWebページが下の方にスクロールする。

【図表21】メニューページをスクロールした



しかしこれでは文字が小さくてほとんど読めない。Webページを拡大表示したい。それには指を2本使う。どの指でもいいが人差し指と中指がやりやすい。2本の指を同時にタッチパッドに触れると、【図表22】のように画面中央に点線の丸印が表示される。

【図表22】中央に点線の丸印が表示された



2本の指をタッチパッドに触れたまま後方にスワイプすると、拡大表示される。

【図表23】 拡大表示された

* Izanami Special \$17.9	
Edamame	\$3.50
Boiled Soy Beans)	⋯
Agedashi Tofu	\$4.95
(Fried Tofu)	
Kalbi	\$7.25

ただ、それだとページの左右も切れてしまう。上下のスクロールは1本指でスワイプすればできた。左右のスクロールはどうするのか。これには驚きの方法があった。

2本指でタッチパッドに触れると、表示されているWebページとGlassのディスプレイの動きが連動しなくなる。表示されているWebページはそのまま画鋏で止められたかのように固定され、Glassのディスプレイだけを動かすことができる。まるでWebページ上を虫眼鏡で見ているかのようにディスプレイを通して見ることができる。2本指でタッチパッドに触れたまま見たい場所に顔を向けることで、ページ上のどこでも見ることができる。

さらにWebページ上のハイパーリンクをクリックしてリンク先のページを閲覧したいときは、2本指でタッチパッドに触れたまま顔を動かして丸印をクリックしたい部分に重ね、タップすると「Select link」というメニューが表示されるので、再度タップする。これで目的のWebページを閲覧できる。

IDやパスワードの入力、フォームへの記入などは、どうしてもキーボードがないとできないので、サードパーティ製のキーボードを使うか、そういう操作はスマホやパソコンに頼ることになる。そういう意味でも、Glassは今のところスマホやパソコンに完全に取って代わるものではない。

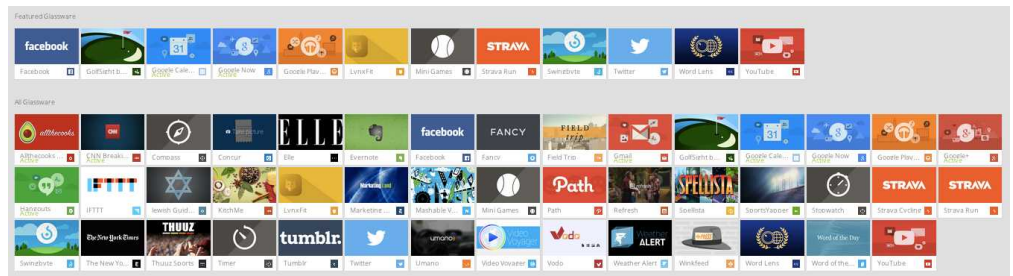
3-11 Glasswareをインストールしてみた

Glassには規定のアプリ以外にサードパーティ製のアプリも追加できる。Glass用に開発されたアプリやサービスは「Glassware」と呼ばれる。早期に予約してGlass

を手に入れたExplorerたちの大半は、Glasswareを開発しようとする人たちだ。

Googleの審査を通ったGlasswareはスマホのMyGlassアプリやWebサイトのGlasswareページ^(脚注)などで一覧できる。インストールすると利用可能になる。執筆時点(2014年5月)で56種類のGlasswareが公開されていた。

【図表24】利用可能なGlassware



(GoogleのGlasswareページより)

繰り返しになるがGlassは手を使わなくてもいろいろな操作ができるというのがメリットだ。できればこのメリットを活かしたアプリを使ってみたい。料理のレシピを参照できるアプリがあれば、Glassでレシピを見ながら調理ができるので便利ではないだろうか。

というわけで、レシピを参照できるアプリを入れてみることにした。スマホのMyGlassアプリで、「Glassware」というタブを選ぶと、利用可能なGlasswareの一覧が表示される。「Allthecoooks Recipes」というアプリをクリックするとインストールが始まる。

【図表25】「Allthecoooks Recipes」のアイコン



(GoogleのGlasswareページより)



^(脚注) <https://glass.google.com/glassware>

アプリをインストールした後、ホーム画面で「ok glass」と発声すると、利用可能なメニューが今までとは変わっていた。今までのメニューに加え、「find a recipe for」と「record a recipe」という2つのメニューが追加されていた。

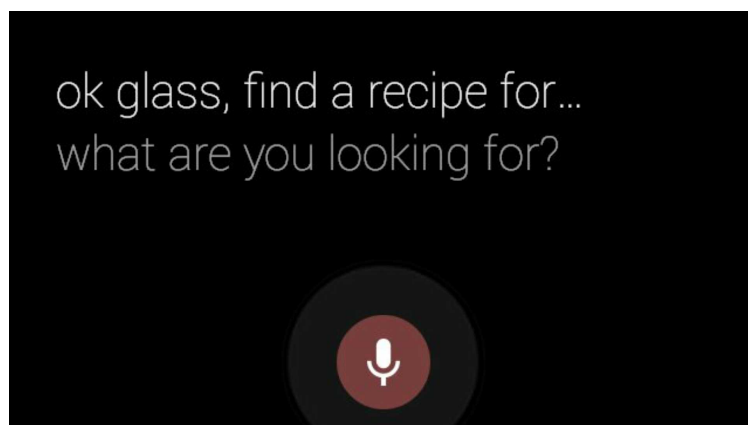
Glassではインストールしたアプリがアイコンになって一覧表示されるわけではない。インストールしたアプリに応じて、利用可能なメニューが変わるという仕組みになっている。

【図表26】 Allthecooksインストール後の音声コマンドで利用可能なメニュー



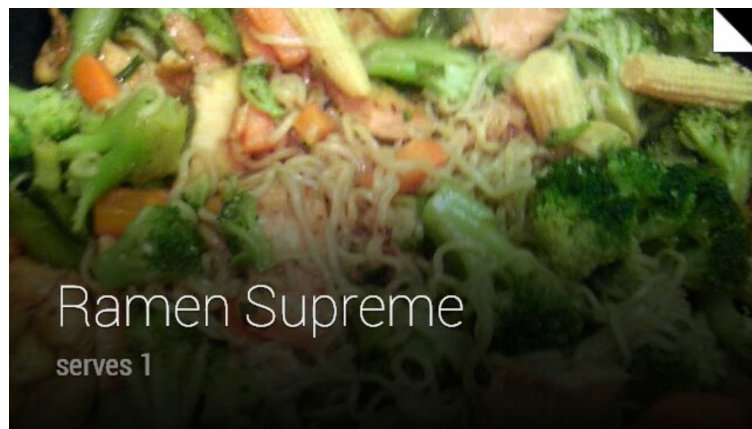
「find a recipe for」と指示すると、何のレシピを知りたいかを音声で入力するよう促される。

【図表27】 Allthecooksのレシピ検索画面



試しに「ラーメン」と言ってみた。アプリが検索を始めた。一番初めに出てきたラーメンのメニューは「Ramen Supreme」だった。

【図表28】「ラーメン」のレシピ検索結果



写真を見る限り、とても典型的なラーメンではなさそうだ。焼きそばかビーフンのようだ。野菜の種類もラーメンにはなじみのないものばかりだ。前方にスワイプすると次々に別のメニューが表示されるが、どれも珍しい料理ばかりだ。普通のラーメンが出てこない。日本人が作ったアプリでもないのに、「ラーメン」を検索したのが間違いの元だ。

仕方がないので最初の「Ramen Supreme」にトライしてみた。右上に紙が折れているマークがあるのは、追加情報があるという目印だ。ここでタップすると追加情報が見られるのだが、これ以降は音声で指示することはできないようだ。やむを得ず指でタップした。レシピが出た。

【図表29】「Ramen Supreme」のレシピ（ステップ1）

Step 1: Chop cabbage, onion and bell pepper. Dice ham or Spam to make 1 cup. In large frying pan, melt margarine. Add cabbage, onions and green pepper. Saute until vegetables are tender. Add ham, red pepper, Accent and 2 packages of seasoning mix from Ramen noodles.

前方にスワイプすると次のステップが表示された。

【図表30】「Ramen Supreme」のレシピ（ステップ2）

Step 2: Stir to mix thoroughly. While vegetables are cooking, cook Ramen noodles according to package (do not overcook). Drain most of water from noodles. Add remaining 2 packages of seasoning mix to noodles. Gently stir in vegetables to noodles. Toss as you would a salad just until mixed. Serve warm. Note: Any flavor of Ramen noodles can be used

ステップ2の画面の下の方が切れている。スワイプしても、顔を下に向けても、どうやってもこの切れている部分を完全に表示させることができなかった。これはアプリのバグではないだろうか。一応見えている範囲で本文は完結し、見えない部分は注のようなので、大勢に影響はなさそうだ。

ところで、作り方は出てきたが、材料の一覧が出てこない。レシピには普通、材料一覧と作り方があるものではないのか。不思議に思っているいろいろ見回してみた。たまたま上を見上げたときに、材料一覧が表示された。

【図表31】材料一覧の画面



このアプリでは上の方に材料が、下の方に作り方が、それぞれ2ページにわたって載っているという構成になっていた。顔の動きで切り替えができるというのはいいアイデアだ。ただし、材料にしても作り方にしても、次のページを見るためには指でタップしなければならない。料理で手がべたべたの状態ではタップはしたくない。

これをすべて音声でコントロール可能にするとか、たとえば顔を右に向けると次のページ、左に向けると前のページなど、顔の動きなどでかなり細かな操作ができるようなアプリにしてくれればもっと便利だ。そのくらいならそれほど無理なく実現できそうだ。料理の品揃えを含め、まだまだ改善の余地がありそうだ。

4 これでは何ができるのか

今回は1日限りの一般販売を利用して**Glass**という拡張現実の世界に足を踏み入れてみた。まだほんの入口に過ぎないが、それでも新たな発見もあり、今後の発展の余地の大きさを感じることができた。

ただし残念ながら、まだベータ版の段階なので仕方がないが、今のところ**Glass**の特長を活かした魅力的なアプリやサービスに出会えていない。高額な投資に見合うだけのメリットがあったとは感じられない。しかしこれだけで終わるはずがない。

Glassが今後どのように発展・普及するかは、当然ながらこれで何ができるのかということにかかっている。それによっては**Glass**が爆発的に普及し、人々のライフスタイルを根本から変える可能性すらある。その可能性は十分にあるという印象を受けた。そのために開発者たちは昼夜を分かたず取り組んでいることだろう。

Glassの特長を活かしたアプリとして思いつくのは、『ロボコップ』などの近未来のSF映画にいかにも出てきそうな顔認証だ。カメラが捉えた被写体の人物の顔を認識して瞬時に正体を特定し、詳細な個人情報ディスプレイに表示させることができる。

これはさすがに個人情報保護の観点から、現実社会で一般的に誰もが使えるアプリとして実現されることは難しいだろうが、医療用や警察の犯罪捜査などに活用される可能性はある。

実際に**MedRef**[®] (脚注) という医療用の**Glassware**が既にリリースされていた。これは患者の顔を認識してカルテなどの情報を表示させたりすることができるようだ。医療用だが誰でも無料でダウンロードできる。試しにダウンロードしてみたが、患者の設定というところでつまずき、何もできずに諦めた。

人間の顔を認識して個人情報を取得するのは問題があるが、花、鳥、風景、星など自然のものであれば問題はないだろう。たとえば道を歩いていて美しい花が咲いていたときに、これは何という花だろうと疑問に思う。そんなときに**Glass**が瞬時に花を認識して詳細情報を出してくれると助かる。まさに花鳥風月の楽しみ方が一変することだろう。

風景については**Google Now**と連動して、有名な場所を訪れたときに関連情報を**Glass**で表示させるようなことがある程度できるようになっているらしい。これも追々試してみることにしたい。

星については現在**Glassware**の開発が進められているようだ。dSky9が開発中の



(脚注) <https://medrefglass.appspot.com>

StarFinder[®] (脚注) が見逃せない。星空を眺めると星座を認識してプロットしてその位置や形状を教えてくれ、関連情報を表示してくれる。これはリリースが待ち遠しい。

他にあったらいいなと思う機能として、望遠レンズを搭載して遠くのものを見たり写真に撮ったりできる、赤外線スコープで暗いところでもよく見える、サーモグラフィで温度分布を画像表示する、リアカメラも搭載して後ろも見えるようにするなどウィッシュリストに加えたい。とりあえず、これくらいできれば1,500ドル払っても惜しくはない。

【執筆者プロフィール】

氏名：高橋 陽一 (たかはし よういち)

経歴：KDD (現KDDI) にて海外通信事情の調査、サービス企画、海外の通信事業者との交渉、法人営業等を担当した後、1995年よりカリフォルニア支社 (ロサンゼルス、サンフランシスコ) 勤務。1999年より外資系通信事業者の日本オフィスに勤務。2006年より日本のIT企業にて米国現地法人の設立、運営等を担当。2010年4月よりKDDI総研にて特別研究員として、海外の通信市場・政策動向の調査分析に従事。2011年9月よりサンフランシスコ在住。



(脚注) <http://www.dsky9.com/apps/>